
でいあ まい とらぶるめーかー！

Peta

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

でいあ まい とらぶるめーかー！

【Nコード】

N5266B

【作者名】

P e t a

【あらすじ】

どこからどう見ても女の子に見える柚木葵、16歳（♂）。彼の悩みは外見……ではなくて、幼馴染み！幼馴染みの夏澄と振り回される葵。二人のとある一日の話。

とある町のとある住宅街のとある所に男の子と女の子が住んでいました。ふたりは幼馴染みで、幼い頃からよく遊びました。時が経っても女の子は男の子を遊びに誘います。しかし、男の子は女の子と遊ぶうとはしなくなりました。男の子は女の子と一緒に遊ぶたびに自分に良くない事が起こる事に気が付いたのです。女の子は………彼女はトラブルメーカーでした………

~~~~~♪~~~~~♪

耳元で目覚まし時計のアラームがなり響く。

「寒い……」

目が覚めてまず思う。なぜ、日本には冬があるのだろうか……寒いのは嫌いだ。アラームを止め、布団から出ようとしない体を引きずりながら洗面台の前に立つ。冷水で顔を洗い、鏡に目をやる。

「……………」

鏡の中では、銀髪でまだあどけなさを残した可愛らしい顔立ちの女の子がこちらを見つめ返している。紛れもなく自分自身。自分で言うのもなんだが……めっちゃくちゃ可愛い。

「あら、葵ちゃん。おはよう。」

「ああ、おはよう母さん。『ちゃん』は止めて……」

柚木葵、16歳。身長154cm、体重45kg。背中まである長い銀髪に可愛らしい顔立ち。そして、性別――…

「俺、男なんだから。」

そう、俺は男だ。紛れもなく男だ。しかし、どういうわけか外見はどっからどうみても女の子。はぁ………。

「あら、いいじゃないの。そんなに可愛いんだから！」

この息子の悩みを全く理解していないのが俺の母親、柚木春菜。長い銀髪で綺麗な顔立ち……つまり、俺の遺伝情報は9割方母さんに偏っている。

「とにかく嫌だ。」

そう言い残し部屋に向かった。母さんが

「昔は素直だったのに……」

とか言ってた様な気がするが無視するでしょう。

「……………」

部屋に戻った俺は絶句した。

「よっ！」

「『よっ！』じゃねー！なんで俺の部屋にいるんだよ！」

部屋には先客がいた。

「え？なんでって、その……暇だったから？」

「なんで疑問形なんだよ。暇だったからってどんな理由だ！だいた  
いどうやって入った！」

「窓から。」

「……………」

確かに窓が開いていた。鍵はかけた筈だが……。よく見ると鍵の辺り  
が円形に切り取られている。

「強化ガラスにしとかないと簡単に入れちゃうよ？」

「犯罪じゃねーか！！！！」

コイツは如月夏澄。俺の幼馴染みでクラスメイト。そして、とんでも  
ないトラブルメーカーだ。俺の平和な日曜日にまで踏み込んで来  
やがって……！てか、窓ガラスを切り取った道具はどこで手に入れ  
たんだよ……！

「ん？なんだそのバック……」

夏澄はバックを大事そうに抱えていた。

「な、なんでもない！なんでもないから！」

へんなやつだな……

「そんなことよりさ、暇でしょ？ちょっと付き合ってよ。」

「嫌だ。」

きっぱり即答してやった。

「なんでよ！」

「俺の身が持たないからだ。」

昔から夏澄と遊ぶたびに俺の身になにか良くない事がふりかかる。  
山へ行った時は遭難するし、海へ行った時はサメが出るし、街へ行った時は引ったくりに遭うし……車に撥ねられた事もある。

「どうしても……ダメなの……？」

うっ！？そんなうるんだ瞳で見つめないでくれ！……正直コイツは学校にファンクラブができる程可愛いし、そんな可愛い娘が幼馴染みである事を神に感謝したこともあるが……それとこれとは別問題だ！夏澄といたらいつか死ぬ！俺は死にたくない！

「どうしてもダメだ！」

「そう………」

ん？どうしたんだ？うつ向いて喋らなくなっちゃった。

「夏澄？」

「……うっ……ひっく……!!」

なにいいいい!? な、泣いてる? 気まずい! 非常に気まずい! 母さんが来たりしたら非常にまずいことになる!

「お、おい! 泣くなって!」

「だって……だって……ひっく……葵、最近遊んでくれないし……うっ……せっかく誘ったのに……!!」

「わかった、わかったから! 今日一日付き合ってやるから!」

「……言うこと聞いてくれる……?」

「ああ! 聞いてやるから! だから泣くなって!!」

………なんであんなこと言っちゃったんだ。

「葵! これ買って!」

「はぁ……」

俺達は近くのアーケードに来ている。赤やピンクのリボンで飾り付けられていて無駄にファンシーだ。

「なによ。今日一日言うこと聞くんて言ったでしょ。」

「嘘泣きだったのかよ……」

「ふっ、騙される方が悪いのよ。それに、涙を流したのは本当だか

ら嘘泣きじゃないわ!」

どんな理屈だよ……。今日一日、財布係決定だな。さよなら、俺の諭吉……。

「で、何を買えと?」

「これ!」

夏澄が指差しているのは腕時計。えーっと値段は……いち、じゅう、ひゃく、せん、まん……ひゃくごじゅうまん!?

「このROLEXほしかったんだ♪」

「買えるかー!?!?!」

「はあ、役にたたないわね。」

ぐっ!?!?なんていいぐさだ!

「無茶言うな! ROLEX買える高校生なんてそうはいねえよ!」

「じゃあこれでいいわよ!」

夏澄が指したのは指輪。シンプルなシルバーリングでなにやら好きな文字を彫ってくれるらしい。値段は……3万……無理!

「そんな金……」

「あれ? 夏澄じゃない!」

誰かの声に遮られた。



「香織さんじゃないですか!」

「丁度良いところにいた。」

「どうかしたんですか?」

……なんか俺抜きで話が進んでいく。

「なあ夏澄……」

「なに?」

「誰?」

「部活の先輩。」

部活の先輩ね。ちなみに夏澄は合気道部だ。しかもめっちゃくちゃ強い。

「夏澄お願い! バイト手伝って!」

「はい?」

「今日のシフトの人達がさ、風邪やら腹痛やらで皆休んじやって……」

うん、それは大変だ。

「もちろんです! 香織さんの頼みを断るわけじゃないじゃないですか!」

よし、このままいけば俺は解放される!

「出来ればあなたも手伝ってくれない?」

「え?」

俺も? ……これは予想外の展開だ。なんとなくトラブルの臭いが

する。

「ごめんなさい。これから用事が……」

「もちろん大丈夫ですよ。ねっ、葵！」

……怖い。笑顔なんだが目が笑ってない。『断ったら殺す』的な目で見られている……。

「よかったわ！それじゃあ二人とも着いてきて！」

「はい！」

「はい……」

元から俺に逃げるといふ選択肢は無かったようだ……。

「ここですか？」

「そうよ。早くしないと。」

「……………」

「葵！早く！」

いやいやいや、待ってって！俺の目の前にはファンシーな空間が広がっている。並ぶテーブルとイス、エプロンドレスの方々。……………メイド喫茶じゃねーか！！！！

「店長！！臨時のバイト連れてきました！」

出てきたのは若い女性。この人が店長か……

「ナイスよ香織！さああなた達、早くエプロンドレスに着替えて！」

「あの、香織さん？」

「葵ちゃん、だったわね。なに？」

「バイトって………」

「メイドよ。」

絶対無理！だって俺男だよ！？男子高校生だよ！？メイドは無理だ  
って！

「葵、早く着替えなさいよ。」

夏澄は既にメイド服に着替えていた。……可愛い……じゃない！

「いや、無理だって！だって俺、男だし！」

「そうだったの！？てっきり女の子かと………」

驚く香織さん。………なんか泣きたくなってきた。

「そんだけ可愛ければ問題なし！さっさと着替えて！」

うおい店長！？

「さあ、あんたら！ひんむいてでも着替えさせなさい！」

「葵………言うこと聞いてくれるって言ったわよね？」

「ごめんね、葵ちゃん。」

ジリジリと三人が近付いてくる………

「い、嫌だ——!!!!」

5分後——…

『可愛い——♪』×3

「ぐっ……!!」

敢えなく着替えさせられた。……今日は厄日だ。

「それじゃあ練習ね。香織、お手本。」

「はあい。じゃあ二人とも真似してね!」

なんか香織さん、はりきってるよ……

「おかえりなさいませ、御主人様♪」

まじで? まじでこれやるのか?

「はい、じゃあ夏澄!」

「おかえりなさいませ、御主人様♪」

「いいわね。じゃあ次、葵ちゃん。」

くっそうここまで来たらヤッテヤルゼ!

「おかえりなさいませ、御主人様♪」

「あはははは！」

「笑うなよ！」

「そうよ夏澄！とっても可愛かったじゃない！」

香織さん……それフォローになってねえ！

「そろそろ店開けるよ！」

「はい、店長！」

「ほら、早速来たよ。」

『おかえりなさいませ、御主人様♪』×3

……あー…涙出てきたよ。

「とんでもない目に遭った………」

バイトも終り、俺達は帰り道を歩いている。

「いいじゃない。メイド喫茶で働くなんて体験そうそう出来ないわよ？」

そう言って夏澄が笑う。何が嬉しくてオタクの相手をせにゃならんのだ……。あれからなぜか俺は人気殺到。あんなに売り上げが出たのは初めてらしい。………複雑だ。

「いやあ、今日は洋服も買えたし、満足満足！」

「俺の金だろ！」

「そんなこと気にしないでよ。」

気にするわ！今日だけで諭吉が何人いなくなった事か……

「ねえ葵……」

「ん〜。」

夏澄はいきなり立ち止まって俺を見た。

「いつもありがと。私のわがままに付き合ってくれて……」

「なんだよ突然。」

「はい。これ……」

夏澄は朝から大事そうに抱えていたバックを俺に差し出した。中から出てきたのは綺麗にラッピングされた箱。箱の中には……ああ、そうだった……忘れてたよ。今日は――…

「ハッピーバレンタイン♪」

そう言って夏澄は照れ臭そうに笑った。

「食ってもいい？」

「うん！」

現れたハート型を一口かじる。苦い。……苦い？

「どう？」

「なんじゃこりゃー！？苦すぎだ！……」

「最近流行りの高カカオチョコにしようと思って……」

「……何%だ。」

「100%。」

「カカオじゃねえか!!!」

なんてもん作りやがる!

「むー! そんなに言うなら返してよ! ……頑張ったのに……」

……泣きそうな顔すんなよ。……ふう。しゃーねーなあ。

「やだね。」

「え……?」

「返さねえよ。全部食う。」

「葵……」

「いいんだろ?」

「……うん!」

なんだかんだ言っても、俺は今の夏澄に振り回される生活が好きな  
のかもしれない。まあ、ちょっとぐらいならトラブルに巻き込まれ  
てやるか……

「ホワイトデーはあの指輪がいいな♪」

「……はあ。」

ちゃっかりしてやがる。買うはめになるんだろうな……ああ、そう  
いえば好きな文字を刻めるんだっけ? ……よし! こう彫る事にし  
よう——…

『Dear My Trouble Maker』

後日談――…

「やべえ、腹痛が………」

「拾い食いでもしたの？」

「お前のチョコのせいだ……!!」

――…END



(後書き)

どうも、書いた後で『今年のバレンタインって水曜じゃん!』と気付いたぺたです。コメディイというものを初めて書かせていただきました。こんなんで良いのでしょうか? 評価や感想をいただけると幸いです。実はこの小説、最後のチョコを渡すシーンを書きた買っただけです。だけど書き始めて、『恋愛モノは書けねー』と諦めてコメディイにしました。……………うゝむ。最後に、ここまで読んで下さった方に感謝を。それでは!

ゝ 2 / 13 (火)    ぺたゝ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5266b/>

---

でいあ まい とらぶるめーかー！

2010年11月21日12時14分発行